

# 子どもの本

## 研究会

【私の一冊】

『草枕』

夏目漱石 著（集英社文庫）

島田 紀三子

今年、夏目漱石生誕百五十年、来熊百二十一年、没後百一年。漱石は、明治二十九年（一九〇四年）に、第五高等学校講師として来熊した。

小説『草枕』の素材となった、小<sup>お</sup>天温泉への旅からは百二十年。その時漱石が辿った道は、「草枕の道」として整備され、いくつかの句碑が建てられている。当時の漱石の家、第3旧居（熊本市中央区新屋敷）から、島崎を通り金峰山を越えて、漱石が宿泊した前田家別邸までは約二十三キロメートル。その道を、漱石が出発した十二月二十九日に歩く完全再現ウォーキングが催されている。

若い人の間で、映画のロケ地を訪ねて写真をSNSに挙げる「聖地巡礼」が流行している。映画化こそされていないが、正に、小説『草枕』の聖地巡礼である。歩くには覚悟が必要だが、その道と一部が一致する県道一号線（熊本玉名線）を車で通ることができる。その道沿いに建てられた句碑の書を、鑑賞しながらのドライブも楽しい。「聖地巡礼」という言葉からは、流行を追うイメージがある。しかし、実際にその場に足を運ぶことで、より深く鑑賞することができる。

「草枕の道」の終点は小天温泉。小説『草枕』の中では「那古井の宿」。漱石が実際に同僚の山下信次郎と宿泊したのは前田家別邸。漱石館として一般公開されていて、部屋の中に入ることができる。また、漱石が使った風呂が明治の風情を残して保存されている。ここでの漱石の体験が、『草枕』の主人公の風呂場での有名な場面に繋がっている。

小説『草枕』の冒頭の文は、あまりにも有名であるが、その冒頭から十数行読み進めたところに「あらゆる芸術の士は人の世を長閑にし、人の心を豊かにするがゆえに尊たとい。」とある。

「芸術」を「文化」に置き換えることができるのではないだろうか。「読書」という「文化」が人の心を豊かにすることを日々祈っている。

（会員 県書道連盟理事）